利根町ゆかりの文化人展

見本

期日：昭和63年11月18日～27日

主催：利根町教育委員会
利根町歴史民俗資料館

利根川は、江戸への物資輸送の大動脈だったことから、沿岸各所に河岸場が設けられ、特に布川河岸は木下河岸と呼応して賑わった。

赤松宗旦の「利根川図志」にもその繁栄のさまが記されており、物資の集積地として繁栄した。また、布川河岸には、江戸の文化人が盛んに来訪し、町民や農民も江戸に上る機会が多く中央の文化の影響下にあった。この地は、特に俳諧が盛んで名の聞こえた俳諧師が多く活躍していた。その他にも、書家の杉野東山、狂歌のバッソン等等が布川河岸を根城に活躍していた。

小林（こばやし）　一茶（いっさ）　（俳人）

江戸時代後期の俳人。宝暦１３年（１７６３）に信濃国柏原（長野県信濃町）の農家に生まれる。１５歳の春（１７７７）江戸に奉公に出る。奉公人として様々な苦労を重ね、その間に俳諧を学び天明７年（１７２７）には、二六庵竹阿に葛飾派の俳諧を学びその死後二六庵を継ぎ、また、葛飾派の総師溝口素丸の門に入った。

寛政４年（１７９２）２９歳の春、西国行脚の旅に上り、七年間にわたって幾内、中国、九州、の諸地方を遍歴し、各地の俳人と風交して、俳道の修行に努めた。同１０年から文化９年（１８１２）までの１５年間は、江戸に流寓して困窮を極めた時代で、夏目成美、一瓢の庇護をうけ、あるいは房総地方を、漂泊して糊口をしのぎ、住所も本所、柳橋など転々とし

た。しかし、この中にあっても江戸俳壇の俊秀と深く交わり、俳境の進展を極めた。この期間は、彼の生涯に最も重要な意義を有し、人生観の進展、視野の拡大、独自な俳風の成立などは、すべてこの期間になされた。

利根川流域をしばしば訪れたのは、寛政年間から文化年間にかけてだった。利根町の人が親しく語り伝えた「べったりと人のなる木や宮角力」の句は、自筆の句帳「七番日記」の文化１４年（１８１７）８月の所に出ている。布川の俳人古田月船等とは親交があった。文政１１年（１８２８）６５歳でこの世を去った。

大津　蘆村（おおつ　ろそん）　（俳人）

明治１２年（１８７９）に現在の利根町押戸に生まれる。名を清という。代々大津家は、俳人が出ている家柄で、蘆村の他に大津貞忠、大津蒼崖がいる。蘆村は、北方の俳人小池尚之から永々斎の名を譲られ二世永々斎を名乗っていた。最近発見された「下総諸家小伝」によれば、大野以兄（上曽根）が永々斎を名乗っていたという。そうであれば、蘆村は第三世かもしれないが、確証はなく今後の研究が必要である。

昭和２９年（１９５４）に７５歳でこの世を去った。

成島　蘭亭（なりしま　らんてい）　（画家）

現在の利根町押戸に生まれる。保太郎といい絵をよくした。明治４３年（１９１０）にこの世を去った。

杉野（すぎの）　嵩雲（すううん）　（画家）

杉野東山の実弟で絵をよくした。布川琴平神社の絵などを残している。

玉峨（ぎょくが）　（画家）

利根町との関係が深いと考えられているが、はっきりはしていない。その作品は町内に多数残されている。

岡野（おかの）　寿年（じゅねん）　（画家）

文化１２年２月１５日（１８１５）現在の利根町押戸に生まれる。本名を岡野茂兵衛という。画歴等明かではないが、在郷画家として生涯を送った模様である。亀の寿年と呼ばれ絵画、彫刻等に亀の作品が多い。明治３７年（１９０４）８９歳でこの世をさった。

岩崎（いわさき）　巴人（はじん）　（画家）

大正６年（１９１７）東京に生まれる。川端画校を卒業、日本表現主義を主宰している。利根町立木に住んでいたことがあり、町内に多くの作品がある。

杉野　東山　（書家）

現在の利根町布川に生まれる。江戸末期の布川が生んだ大書家として、その名は多くに知られている。搾油を業としてかたわら書を学び、晩年は書三味の生活をした。書は町内の石碑や寺社の扁額になって数多く残っているので、だれでも見られる。琴平神社のてん額、奥山泉光寺の扁額、早尾天神社の芭蕉句碑がある。

嘉永４年（１８５１）に８３歳でこの世を去った。

杉山　林哲　（彫刻家）

現在の利根町押戸に生まれる。仏像その他の作品がある。布川琴平神社のてん額は、書が杉野東山、彫刻が林哲で町の文化財に指定されている。

磐戸　清実　（数学者）

現在の利根町中谷に生まれる。安政２年（１８５５）８月に８４歳でこの世を去ったこと、門弟は布川をはじめ生板、布鎌西新田、立木、竜ヶ崎大徳北、河原、立崎、羽中、押戸、中谷、福木と広い範囲にいることがわかっている。弟子は、幕末期に古文書にたびたび名前が出てくる村役人級の人々である。

磐戸塾は、かなり有能な人を数多く育てた私塾の先生をしていたと考えられている。

算学のほかにも和歌をたしなんだらしく、墓石に辞世の歌も刻まれている。死期を予感しながらも悟りの境地で悠然としていたことがうかがえる。

また、楓外と号して俳諧もたしなみ「手なれねば不出来がちなる粽かな」の句を残している。

野口（のぐち）　如月（じょげつ）

明治１４年（１８８１）福木村（利根町福木）に生まれる。本名を茂平といい、早稲田大学法科を卒業。大正５年（１９１６）「稲敷郡志」同７年（１９１８）に「北相馬郡志」同１４年（１９２５）に「稲敷彰考録」等を著作発刊をした。明治４４年（１９１１）「いはらき新聞」の記者となり、大正５年には「大やまと新聞社」を創立した。昭和４３年（１９６８）に８７歳でこの世を去った。

赤松（あかまつ）　宗旦（そうたん）　（地誌研究家・医師）

文化２年（１８０５）布川に生まれる。８歳の時父を亡くし母方の実家（千葉県印旛郡吉高村）に引きとられ、その地で前田宗珉に師事し、医術、漢学を学ぶこと１５年、天保９年（１８３８）３３歳の時に布川に開業し、かたわら地誌研究に打ち込み、安政５年（１８５７）に「利根川図志」を完成し世に送り出した。父がどれほどの資料を残したか不明だが、彼は文

献収集に実地踏査に相当の日時をついやし金銭を投じている。

いわば医業は、生計がたてばよい程度とし、生涯を利根川研究にかけてしまったのである。未発表の著書に「笏記」、「布川案内記」等がある。

文久２年（１８６２）に５７歳でこの世を去った。

髙野（たかの）　源蔵（げんぞう）

天保４年（１８３３）に現在の利根町大房に生まれる。髙野塾という学塾を開いた。この学塾は、誠求学舎の名も使った。神山魚貫に和歌を学び、字を充行、号を昂斎あるいは竹の舎といった。多数の歌の外にも「和歌初学」「磯麿翁略伝」「文間村役場沿革誌」等の著作を残している。蛟蝮神社奥の宮の「雨乞い絵馬」（町指定文化財）の願文を書いたのも髙野源蔵でした。

明治１７年（１８８４）長沖村、豊田村、長沖新田、須藤堀村、押戸村、大房村の戸長となり、明治２２年（１８８９）土地区画改良委員を拝命し、また文間村第一級議員に当撰している。

大正元年（１９１２）にこの世を去った。

参考資料

国史大辞典　　吉川弘文堂

朝日年鑑　　朝日新聞社

利根町史第１巻、　髙野家文書